
ねこねここねこ

白井文子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねこねここねこ

【Zコード】

N1648W

【作者名】

白井文子

【あらすじ】

猫嫌いの少女と猫になりたい少女の物語。

ねこねこねこ。

私が呟くと、ミサキが同じくらい微かな声でにやあと呟つ。同時に頭で白い猫の耳が揺れる。折り紙とヘアピンでこしらえた猫耳の飾りを付けた彼女が、頭を揺らせて動かしているのだ。どうやれば本当の猫の耳みたいに動くか研究したの、と得意気に胸を張るミサキの言葉が思い起こされる。が、猫嫌いの私にはその工夫は上手く伝わらない上に、耳を気にするあまり彼女の表情は滑稽もある。苦笑が浮かぶ。

ねこねこねこ。もつ一度、今度はさつきよりはつきりと、反芻するよじ口に出す。昔どこかで聞いたフレーズである。童謡か絵本か、と頭を捻る私を、ミサキは首をかしげて見つめていた。たぶん、彼女が出来うる限りの猫らしい仕草で。結局そちらに気を取られて、思い出すことは出来なかつた。

次の日には尻尾が生えていた。段ボールを切り抜いただけの茶色い、固そうな尻尾だ。耳は白いのにいいんだろうか、と思うが、口には出さない。私のとなりに座り、黙つて小さな尻をゆるりゆるりと振る彼女を横目で見て、読んでいた本に栞を挟む。

「猫らしく尻尾を振る練習?」

「なんで解つたの。」

「猫らしい」警戒をあくまで丸い瞳孔の奥に光らせて、ミサキは私を睨み付ける。私は肩をすくめた。

「あんまり似てないね。」

吐き捨ててもう一度本を開いた。友達に薦められて読み始めた新書である。なんでもないことを漢字ばかり使ってやたらと小難しく説明していく、字を追うだけで頭が痛くなつてくる。どこまで読んだかとページをざつと田でなぞつたところで、ミサキが思いきり左腕を引っ搔いた。思わず悲鳴をあげる。

「なんてことするの！」

「猫は引っ搔くものだからいいの。」

当然のように言い放ち、そっぽを向いて頬を膨らませる。生意気な
その頭を軽く小突くと、また猫の鳴き真似をする。

「そんなに猫が好き？」

呆れ混じりにそう尋ねると、彼女は勢い良く首を捻つてこちらを向
き、怒ったような顔で答える。

「べつにー。」

そして、赤い薄い舌をべえと出して見せた。

ミサキが父親に連れられてうちに来たのが一週間前の話である。
私の義理の叔父に当たるその人はなんだか妙に腰が低くて、私の氣
に入らなかつた。ミサキはミサキで、目が合つてもにこりともしな
かつた。恐る恐る、お姉ちゃんのこと覚えてる、と聞くと、何も言
わずに首を横に振つた。彼女の母親が妊娠したらしい。また一人従
兄弟が増えるのだ。それで入院している間、ミサキを預かつて欲し
いのだと叔父は言つて、母はその頼みを二つ返事で受け入れた。母
から姉に変わつた頼もしい彼女の顔と、無愛想なミサキの顔を見比
べて、先が思いやられるな、と内心で呟いた。

「親指姫はあんたのこと嫌いだつて。」

ミサキが一番はじめに私に発した言葉が、それだつた。まるで意
味が解らずに、ぽかんと口を開けたまま凍りついた私に、ミサキは
あからさまな嘲笑を加えて投げて寄越した。

「残念だつたね。」

「なに言つてるの、意味解らない。」

「頭悪いの。」

そこで我慢がならなくなつて、ミサキの太ももを蹴り上げた。彼女
は甲高い声を上げてから、敵意を剥き出しにした表情で私を睨み付
けた。

「夢を見れない人間に、生きてる意味なんてないんだから。親指姫がそう言つんだから間違いないよ。」

涙目で捲し立てる彼女の語調には、絶対的な自信が見え隠れしていた。

「誰が、つて？」

「あんたなんかに教えない。」

叫んでミサキは走り去つた。間もなく母のいる台所から、お姉ちゃんが蹴つたの、と訴える泣き声が聞こえた。適当に宥めてくれたのだろう、母親からお咎めはなかつた。

しかしそれからも、暴力を振るわれたのにも関わらず、ミサキはいつも私の隣にいた。何やらぶつぶつ呟いていたかと思えば、折り紙を切り抜いて例の猫耳を作つては、手鏡を取り出して眺める。そしてまた僅かに形を調整する。生意氣な素振を見せはするが、やはりまだ幼い子供なのだろう、苦笑混じりにそう思い始めた頃に、ミサキがとうとう完成した猫耳を自慢してきたのである。彼女なりの試行錯誤を不本意ながら見守り続けていた私にしてみればそれは今さらのお披露目であつたのだが、ミサキは作業の間、私のことなどいないものと見ていたらしい。

「リアルでしょ。」

誇らしげに微笑むミサキの頭には、到底リアルとは言えない、三角に切つた折り紙が揺れている。図鑑を睨んで作つてしているところを見ていなければ、それが猫の耳だとは解らなかつたかもしれない。

「なんで私に見せるの。」

予期しない問いだつたのだろう、ミサキは微かに首をかしげて、何度も瞬きをした。答えが返つてくる様子はなかつた。それよりも気になつたことがあつた。

「その動き、ちょっと猫に似てるね。」

あくまでちょっと、だつたのだけれど、突然綻んだミサキの満足そうな顔に、とてもそうは言えなかつた。それからミサキは、ことあ

る毎に上田遣いに首をかしげるようになつた。

ねーじねーじねーじ。

ミサキを見てみると、ねーじねーじねーじ、が頭から離れない。出所が解らないのが、寧ろこの言葉を色濃く印象づけているようだ。私が何度もかも解らないねーじねーじねーじを唱えると、ミサキもまた何度も目かも解らない首をかしげる仕草をして見せた。

「それなんな。」

「解んない。」

「絵本?」

「覚えてないのよ。」

暫く空に手を泳がせて黙っていたミサキは、やがてぱつぱつと言葉を発した。

「親指姫は、知らないって。」

「親指姫?」

前にも彼女から聞いた覚えのあるその言葉を、引き留めるように繰り返す。

「知ってるでしょ、親指姫。」

当然のように答え、それでもきっとミサキは、私にその意味が解らないことを見越しているのだと思つ。答えを待つ風を装いながら、用意した次の言葉はもう喉まで出かかっているのだ。

「絵本の?」

「そう。私は、親指姫なの。」

腑に落ちないまま黙り込んでしまう。単語は理解できるのに。怪訝そうな表情をしていたのが可笑しかったのか、ミサキはくすりと笑つて続ける。

「私は魔法使いになるから。親指姫が着いてくれるの。本当は猫がいなくちゃいけないんだけど、私喘息だから、触っちゃいけないの。」

そして、頭についた猫耳を指で示す。こんなに長く話してくれるの

は初めてだ。若干の動搖を隠せないまま、相槌で話の先を促す。ミサキの表情も、今までで一番輝いていた。

「聞きたい？私がどうして、魔法使いになれるのか。」

私が迷わず頷くと、ミサキのあどけない物語りが始まった。

このあいだ学校でね、授業中に、水曜日だから三時間目は理科だったの。だけど、理科の教科書って、虫の写真が載ってるでしょ。違うの、普通に虫を見るよりずっと大きくて、こっちを見てるやつ。あれって怖いでしょ？目、大きいし。だから教科書、開くのやだつたの。それで、あんまり話聞いてなかつた。あ、ママに言わなide ne。

それでね、退屈だつたから、ノートで遊んでたの。あ、ノートにも、本当は虫の写真貼らなきゃいけないんだけど、私は捨てたから怖くないのね。ノートの、何も書いてないページに、鉛筆できれいに丸を描いて、それを顔にしたり、地球にしたり、お花にしたり、風船にしたりして遊ぶの。結構、色々出来て、楽しいんだけど。

それで、魔方陣を書こうつて思ったの。

魔方陣って知ってる？私本で読んだの。悪魔とか、妖精を呼び出すのに、模様を付けた丸みたいのを使うんだけど、それが魔方陣なのね。授業中に妖精が来てくれるなら不思議でしょ。みんなびっくりするでしょ。だから、素敵だと思ったの。しかも、私の妖精で、なんでも言つこと聞いてくれるんだから。ノートにね、あ、使ってないところだから大丈夫なんだけど、魔方陣みたいな、模様の入った丸をたくさん描いた。だけどあんまりよく覚えてなかつたから、結構できとう。

ちょっとずつ変えて、本当はどんなんだつたかなあ、って思つたら、急にひとつ、私の描いた魔方陣が光つたの。ほんとだよ。ほんとに、ほんと。信じないでしょ。それで、出でたのが親指姫。ノートから、すうつて出てきた。不思議でしょ。自分で親指姫って言うんだから間違いないよ。みんな見えちゃうつて思つて慌てた

けど、誰も見てなくて、ラツキーだと思つた。でも、本当は見えてなかつたんだつて。あとで親指姫が言つてた。

親指姫は、蝶々の羽が生えてて、ピンクのドレスがふわふわで、凄く可愛いの。ほんとに、絵本の中から出てきたみたい。それでね、親指姫が、魔法使いになりなさいって言つて。妖精を呼び出せるような、夢を見られる子は、魔法使いにならなきや駄目だつて。

私はうんつて言つた。だから私は魔法使い。親指姫は今もここにいるの。見えないでしょ。私には見えるの。いいでしょ。魔法使いになるにはね、何も練習しなくてもいいんだつて。大人になつてもまだ親指姫が見えていたら、私は魔法を使えるようになるの。こんなにはつきり見えてるんだから、簡単だよ。

だから、私は本当に魔法使いになるの。

そう締め括ると、ミサキは照れ臭そうにはにかんだ。何も言つことが出来なかつた。空想にすぎないのだろうとは思うが、思わず引き込まれてしまつ話ぶりだつた。あまりにも真剣に話すミサキのまわりに、もしかすると本当に、彼女の言ひ親指姫が飛び回つているのかもしれない、と思わせるほどに。

「凄いね。」

話の途中までは終わつたら何を言おうかと考えていたのに、口から溢れたのは素直な贅辞だつた。ミサキもそれは予想していなかつたようで、喜ぶよりもむしろ驚いた顔をして、それでも何度も頷いた。「本当は猫を飼わなきゃいけないんだけどね。そうしたら発作で死んじやうつて言つたら、じやあ自分でどうにかしなさいって、親指姫が。」

「それでその耳？」

「そう。」

改めて皺のついた折り紙を眺める。

「次作るときは手伝つてあげるよ。もう壊れそうだし。」

ミサキは今度こそ目を丸にして、それでも控えめな声で、あり

がとづ、と叫つた。

ミサキを預かつてしばらく経つたある朝、ミサキは自分が姉になつたことを告げられた。元気な男の子、だそつだ。私の母がにこやかにそつ話をのを、ミサキはどこか釈然としない顔で聞いていた。

その日、ミサキは母に連れられて、弟の顔を見に出掛けていつた。一人で家に残された私は、意味もなく部屋を歩き回つたり、カレンダーを眺めたり、あの手この手で暇を潰そうとした。着いていつても良かつたのだけれど、眉をひそめたまま固まつてゐるミサキと、一緒に行く気にはなれなかつた。五月生まれか、確か、牡牛座だけ。水瓶座の姉と、仲良くやれるといいのだけ。

ミサキの親指姫は、ちゃんと彼女に弟の存在を教えてくれるだろうか？

下手くそな猫の耳を付けて頭を振る九つも年上の姉を、彼は受け入れてくれるだらうか？
漠然とした不安は尽きない。

三時間かそこらで早々と帰つてきたときも、ミサキは何やら心底不満そうな顔をしていた。

「お帰り。」

声を掛けると、ミサキは答へずに手を出した。預かつていた耳つкиピンをその手に乗せてやると、よろしく、と言つた風に頷く。私の隣に座り、ピンを付けながら、ミサキは溜め息をついた。

「みんなが言つほど可愛くない、赤ちゃんつて。でぶだし、くしゃくしゃだし。泣いてばっかりだし。」

「まあね。」

「早く魔法が使えるようになりたい。そつしたら、弟なんて要らな
いって言つたの。」

思わず吹き出してしまつてミサキに睨まれる。慌てて真面目な顔を取り繕い、彼女を宥めようと頭を撫でてやる。手が往復する度に、

耳がカサリ、カサリと音を立てる。

「そこまで言わなくても、ねえ。」

場がしんと静まつてしまつ。ミサキはただ私に身を任せていた。耳の鳴る音だけが、単調なリズムを刻む。

「親指姫は、夢を見られない人間に生きている意味なんてないって、いつも言うの。」

弱々しい、泣き出しそうな声だつた。昨日までの生意氣なほど自信に満ち溢れた彼女からは想像もつかない。

「私は夢を見られてないのかな。だから……。」

言葉は途中で吸い込まれるように消えてしまつた。代わりに幼い嗚咽が漏れる。手のひらに収まつてしまつ小さな肩が震える。

「どうしたの。大丈夫だから。」

泣き出してしまつたミサキを曖昧に慰め、頭を撫でる力を少し強くする。耳が派手に折れ曲がつてしまつ。焦つてているな、と苦笑する。

「弟なんて嫌い。大嫌い。ママに会いたい。」

ミサキは何度もそう繰り返していた。大丈夫よ、大丈夫だから、と、私も馬鹿の一つ覚えのよう同じ言葉を重ねながら、ふと思いついて咳く。

「ミサキはその辺の人よりは、ずうつと夢を見てるでしょ。」

悪意のない皮肉も混ざつた言葉だつたのだけれど、一度、一際大きくしゃくづ上げて、ミサキは素直にうん、と返事をした。

間もなくミサキは帰つていつた。帰り際に私に駆け寄つてきて、今度猫の耳作つてね、と耳元で囁く。私が快諾すると嬉しそうに笑う。いつになく可愛らしくと思つ。

「親指姫と弟君に宜しくね。」

「うん。弟は、魔法使いになるまでだから我慢する。」

さらりと恐ろしいことを宣言し、頭の猫耳を揺らす。私が折つてしまつたせいでかなりぼろぼろになつてしまつてしているのだが、彼女は氣にも留めていない様子だつた。

ミサキの家族が乗った緑の軽自動車が角を曲がると、窓から手を振るミサキの姿が一瞬だけ見えた。

両親に連れられ、弟の手を引いたミサキが次にうちに遊びに来たとき、弟は五歳になっていた。

長く伸びた髪をポニー・テールに纏めたミサキは、ケイタと名付けられた弟をいとおしそうな目で見る。私のこと覚えてる?と聞くと、覚えてるよーなどとけらけらと笑う。疑わしいものだ。警戒する様子もなく良く私になつてくるミサキは、テニス部に入ったんだとか、面白い友達がいるとか、ここにこ笑いながら丁寧に話してくれた。良きいる中学生と言つた風だった。

「親指姫は?」

ついそう尋ねる。ミサキはちょっと首をかしげる。あ、と思つたところで、快活な声が思考を遮る。

「あー、小さいとき好きだつたなあ、懐かしいなあ。」

すっかり忘れてしまったのだろうか。ミサキはビヤウラ、魔法使いにはなれなかつたようだ。ケイタを自分から膝に抱いているところを見ると、その必要はなかつたのかもしれないが。

もし私が猫耳を傷つけてしまわなかつたら、ミサキは魔法使いになるために猫にならうとしていた、幼い自分を忘れなかつただろうか?

きっと仕方ないことなのだろう。小さいときのことを克明に覚えていることなど出来ないのだろうから。だがどうしても、自分の指先で折れた折り紙の感触を思い出さずにはいられなかつた。

ミサキの親指姫が今のミサキを見たら、生きている意味がない、と一蹴するのだろうか?

「そりそり、私猫飼うことにしたの。やつと小児喘息が治つたから。」

ミサキが嬉しそうに言つた。

「ねこねこねこ、って歌あるみね。あれ、歌だけ、絵本だけ……。」

私もそのフレーズには聞き覚えがあった。ミサキと一緒になつて首をかしげる。

「なんだっけね。」

ねこねこねこ、と口の中で唱える。いやあと鳴べサキの声が、

脳裏を過つていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1648w/>

ねこねここねこ

2011年10月9日14時52分発行